

三角 成彦（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了生）

**要旨：**本発表は前世紀の半ばから今世紀初頭にかけて、各々の専門をこえて深長な諸議論を提起した今村仁司と栗本慎一郎の思想が持つ独特の意義と特長を明らかにしようとする研究の一部である。その主なねらいは次の二つである。第一は、二人の思想家が諸所で打ち出した議論のうち、現在参照すべきと思われるものを紹介し、検討することである<sup>1</sup>。第二は、今村の近代特有とされる歴史＝時間意識の批判およびそれに代わり得る歴史＝時間の捉え方と、栗本の〈層の理論〉による近現代の支配的な世界観（＝還元主義的、機械論的世界観）の乗り越えの試みとが近代の延長線上にある現在、予測される未来において参照されるべきだと説得的に論じることである。

上の目的を達成するため、本発表は右の順序で展開される。序論となる第一部では、今村の近代的時間意識の批判と栗本の〈層の理論〉とが、散発的な言及はされているものの、論究の中心対象にはされてこなかったことを確認する。第二部では、二人の議論の骨子を直接・間接の引用を通して抽出することが試みられる。圧縮して言えば、「死を生産する」（今村, 1994 p. 101）と批判される近代時間意識とは、現在の否定および過去の忘却とセットになった未来を絶対的に優れたものとする歴史＝時間の見方であり、ベンヤミンを創造的に解釈する今村(1995)は広義の死物に注意を向け、歴史＝時間を決して連続的でなく他でもあり得たものとして把握するよう促している。一方ポランニーの生命論とケストラーの機械についての思索に着想を得て構築された〈層の理論〉とは、素粒子のような事物の最小構成要素とされる物質から個々の人や動物、さらには社会や共同体にいたるまで、スケールにかかわらずあらゆる「形」を持つ存在にはそれを構成する諸要素を統御するのは別の「生命的システム」があると把握し、万物に「上下に積み重なる複層の階層」（栗本, 2013, p19）を見る理論である。一言でいえば、〈層の理論〉は個々の存在を関係に溶解させない有機論的世界観といえる。第三部は、二人の議論に現代思想の实在論的な傾向を持つ論客たちの主張と類縁性があることを指摘し、その先見性を強調して議論を閉じる。

**キーワード：**今村仁司、栗本慎一郎、〈層の理論〉

注

1 栗本は専門を経済人類学とすることが多いが、五十を超える著書は広範な題を扱っており、彼を思想家とするのは不適當ではなかろう。その博学の一端については室井&栗本（2015）を参照。

書誌（抄）

Koestler, A. (1976). *The ghost in the machine*. London: Hutchinson.

Polanyi, M. (1968). Life's irreducible structure. *Science*, 160, 1308-1312.

今村仁司（1994）：『近代性の構造—「企て」から「試み」へ』講談社。

今村仁司（1995）：『ベンヤミンの〈問い〉—「目覚め」の歴史哲学』講談社。

栗本慎一郎（1981）：『パンツをはいたサル—人間は、どういう生物か』光文社。

栗本慎一郎（2013）：『栗本慎一郎最終講義—歴史学は生命論である』有明双書。

室井尚、栗本慎一郎（2015）：『この人\*を見よ！（Ecce Homo-pants!）』横浜都市文化ラボ。